全てがゲームで決まる？なら彼女は化け物だ。

とらchixi

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただのノゲノラの女性とオリ主の百合を書きたかっただけ。続くかわかんない。

一応原作に沿って書いていく。基本原作キャラの視点で進める

目次

異世界にログインしました ―― 1
彼女はやはり変わらない ―― 14
白と黒の狂依存 ―― 23

異世界にログインしました

……空ｓｉｄｅ

カタカタカタカタカタッ！カタカタカタカタカタッ！……

「あーっ何とか勝てたぁぁ。……つか妹よ、『　　』名義のメインアカウントを足で操作するの辞めてくんない？兄ちゃん心臓に悪い」

「……おなか…すいたから。……にいも食べる？」

白がカロリーメイトを俺に向けてくる。

「……頂きます」

貰ったカロリーメイトを口の中に放り込むと、パサパサした食感が口の中の水分を奪っていく。

喉が乾いたからそこら辺にあったジュースを飲み、パソコンに意識を向ける。そこで白が何やら聞いてきた。

「……にい。黒から……連絡…来てない？」

「あー、兄ちゃんの方には来てないな」

「…そっか」
「白。兄ちゃんが連絡出しておこうか？」
「…うん」
　んー黒って誰だって？そうだなぁ簡単に言うと白の初恋の相手だな。ん？白に恋人が出来てもいいのかって？まぁ兄ちゃん的には相手が黒だからいいんだけどね？だって目の保養になるしね？あ、今更だけど黒は女性だからな？百合って素晴らしいだろ？ここが全て遠き理想郷（アヴァロン）だったのか。
「……にぃ。黒で変な事考えてたら……許さない…よ？」
「待て待て待て！妹よ！兄ちゃんはそんな事一切考えてい、いませんけどどど!?」
「動揺してる？黒に……報告？」
「それだけはやめて頂けますか！妹よ！」
「…ん、許す」
　白の前で黒の事を考えたら、兄ちゃんの身が持たない。
　ピロンッ！
「…来たッ！」
　白が慌てたようにタブレットに視線を移す。
「にぃ！黒から返信来た！」

「そうだな。なんて書いてある？」
「……お金いっぱい稼いだから遊びに来るだって」
「黒も大概だな」
「…黒は天災。白より凄い」
「んでいつ来るって？」
「……今から？」
　ピンポーン
　家のインタホーンが鳴る。基本俺たちの家に来る奴は宅配便か黒だが、この際は黒がやってきたのだろう。ほら、白が慌てて扉を開けに行っただろ？
「黒！会いたかった！」
「し、しろ！苦しい！」
　白が黒を部屋に招くと同時に黒に抱きつく。抱きつかれた黒はあたふたと俺に助けを求めていた。だが断る！アイコンタクトでそれを伝えると黒は捨てられた猫のような目でこちらに視線を送ってくる。
　だがそれもつかの間、抱きついていた白が黒の頬に手を合わせると白の方に寄せては、キスをした。白の小さな手が黒の服の中に入り黒の顔は我慢しているのか目を瞑って白の攻めを耐えていた。１８禁は白にはまだ早いので流石に止めるぞ！

「妹よ！１８禁はまだ早いぞ！兄ちゃんはそんな事許しません！」
「にぃ。女の子同士だからセーフなの」
「し、しろ？今はそんな気分じゃないかな？」
「ならにぃが寝たら続きしよ？」
「空！一生寝ないでください！」
「俺に死ねと言ってるのか!?」
　ピロン♪
　そんなバカ騒ぎをしているとパソコンからメールの着信音が部屋に響いた。
「……にぃ。メール来てる？」
「誰から？」
「にぃの…友達？」
　グサッ！
「あっれー？兄ちゃん黒以外の友達なんていないんだけどなー？白さんはそれを知って言ってるのかな～？」
「……気の所為」
「って、相手からのメール見ないの？」
　黒がパソコンの方に指を指して言ってくる。

「えーなになに?……」
空がメールを読み上げる。
『　』達へ
『君ら兄弟・友は、生まれる世界を間違えたと感じた事はないかい?』
「なんだこれ?つかなんで俺ら『　』が兄弟だって知ってんだ?それに黒の事も分かってるような言いぶりだなぁ。」
「……どうする?」
「駆け引きのつもりか?まぁ、ブラフだとしても乗ってみるのも一興か」
カチッ。
画面が切り替わるとチェスのボードが出てきた。
「あ、チェス?」
「…おや……すみ」
「……チェスですか?」
白はチェスと分かった途端眠ろうとしてたが、流石に俺じゃ高度なプログラムだったら俺一人じゃ手に負えないから白に頼み込む。まぁ黒も出来るが、黒のチェスはホントにルール無視だから参考にならない。
俺がそう言うと白はムスッとしてから黒に視線を送ってからチェスをし始めた。

「……黒。私が勝ったら言う事1つ」
「って、しろが絶対勝つじゃないですか！」
「…勝つと分かってるゲームに挑む。意味の無い試合。相応の報酬。求む。」
「仕方ないですね。それでいいですよーだ」
「チェスなんて……ただの○×ゲーム」
　最初は白が優勢だったが中盤辺りから相手の動きがかわった。
「味方の退路を絶った？」
「待て白。プログラムは常に最善の手を打つ。だからこそお前は勝てる。だが、こいつはあえて悪手で誘ってる。人間だ」
「そうだねぇ。プログラムなら動きが決まってるからね。ふーんこの相手面白いね。久々に興奮してくるかも……空、白。早く僕を楽しませて！」
　黒がここまで言う相手か。黒には他の人間には無い感覚が宿ってる見たいなんだが、これがまた面倒臭い物らしい。
　普段の黒は何も無いんだが、ゲームに関しては黒はヤバイ。相手が凄ければ凄いほど興奮が治まらないらしい。以前俺らとチェスをしたんだがほんと凄かった。チェスの駒を動かす度に体が、震えてるんだぜ？男の俺からしたらとてもエロかった。だが、妹からの目潰しが飛んでくるオマケ付きなんだよ。

まぁ、簡単に纏めると黒は相手が強ければ強いほど興奮してしまうと言う体質なんだ。そのくせ黒はとてつもなく化け物だ。
「むぅ。……黒が興奮していいのは白だけ」
「まぁ白は落ち着け。白が技量で凄いことは俺らが分かってる。揺さぶり、誘いは俺が読む。空と白、2人で『　』だ。俺らに勝てる奴が居るか見せてもらうじゃないか」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

数時間後
『チェックメイト！ｙｏｕ，ｒｅＷＩＮＮＥＲ!!』
「「はあアアアアアア」」
「勝ったぁぁぁぁ！」
「こんな苦戦したの黒とのチェスぶり…相手ほんとに人間？」
「お疲れ様2人ともこんなにも接戦とした勝負ほんと良かったよ？興奮が治まりきらないよ」
黒は肩を上下に揺らしながら俺達に試合の感想を言ってくる。
そんな黒に興奮したのか白が黒にジリジリと近づきそこには百合の空間が出来てしまった。これ以上は見せらないよ！

ピロン♪
パソコンからまたメールの着信音が響く。
相手からのメールだろうと思い開くと予想外な返信だった。
『おみごと。
それほどまでのゲームの腕前――――
さぞ、世界が生きにくくないかい？
君達は、その世界をどう思ってる？
楽しいかい？
生きやすいかい？　』
「んなわけないでしょ？僕だってこの世界はとても残酷で悲惨で生きてても意味が無い用な場所」
「ルールも目的も不明瞭な中、７０億ものプレイヤーが好き勝手に手板を動かし、勝ち過ぎても負け過ぎてもペナルティ。パスする権利も無く。喋り過ぎたら疎まれる。パラメータも無くジャンルすら不明こんなものただの「「クゾゲー」」」
『もし、単純なゲームですべてが決まる
世界があったら――――――　』

「「あぁ、そんな世界があるなら
俺達「僕達3人は生まれる世界を間違えたわけだ」」
途端パソコンの全画面が砂嵐になり画面の中央から手？みたいなものが現れ、いきなりこう言った。
『僕も、そう思う！
君達は正しく生まれる世界を間違えた！
ならば
僕が生まれ直させて上げよう！
君たち3人が生まれるべきだった世界に！』
――――――瞬間、俺達は遥か上空に居た。そのまま急降下している最中だった。
「ようこそ！僕の世界へ！」
「「なんだぁこれぇぇ!!」」
そんな中、帽子を被った少年？見たいな子が呑気に説明をしてきやがった、
「ここは君たちが夢見る理想郷！盤上の世界〝ディスボード〟！
この世のすべてが単純なゲームで決まる。人の命も、国境線さえも！」
白がその説明している相手に尋ねる。

「……誰？」
「僕？僕はテト！あそこに住んでる。…神様？」
「神様？」
「それどころじゃねぇ！どうすんだよこれ！」
　俺がテトに対して尋ねるが、テトはそのままこの世界のルールを説明しだした。そんな事してる暇ねぇだろぉぉぉ！
「この世界は１０の盟約によってすべてが決定する！
〔１つ〕この世界におけるあらゆる殺傷、戦争、略奪を禁ずる
〔２つ〕争いは全てゲームによる勝敗で解決するものとする
〔３つ〕ゲームには、相互が対等と判断したものを賭けて行われる
〔４つ〕〝三〟に反しない限り、ゲーム内容、賭けるものは一切問わない
〔５つ〕ゲーム内容は、挑まれたほうが決定権を有する
〔６つ〕〝盟約に誓って〟行われた賭けは絶対遵守される
〔７つ〕集団における争いは全権代理者をたてるものとする
〔８つ〕ゲーム中の不正発覚は敗北と見なす
〔９つ〕以上をもって神の名のもと絶対不変のルールとする」
「だからそんな事言ってる場合かぁぁァァ!!地面が！もう地面がぁぁぁ！」

「にぃ！」
「空っ！白！もう間に合わないよ！」
「白ッ！黒ッ！」
　せめて白と黒だけでもッ！２人を抱き寄せ俺をクッションの様になる姿勢にする。そして来ると思われる衝撃に構えるが……来なかった。
　呆然としているとテトが俺達をのぞき込むように見て最後のルールを言ってくる。
「そして１０！みんな仲良くプレイしましょ！」
「っておい！」
　俺が起き上がり声を掛けようとするとテトはもう居なくなっており、辺りを見回してると何故か、俺の右手に柔らかい感触があった。
「んッ！空ぁ～。擽ったいよ～」
「って、すまん黒！大丈夫か？」
「別に～僕は大丈夫だよー？けどー白が怒ってる？かな」
「……にぃ。黒のおっぱい揉んだ。白はまだ今日揉んでないのに」
「待て待て！兄ちゃん不可抗力だから！」
「…でも、にぃ。顔ニヤけてる。Ｇｕｉｌｔｙ」
「もう！空は僕の胸をそんなに揉みたいの？仕方ないなー。もっぺん揉んでおく？」

「……黒。白以外に揉ましたら駄目」
「ちょっと待て！2人とも！今はそんな事してる場合じゃないだろ！ここは何処なんだよ！」
　俺達が落ちたクレーターから上がると周りには石が浮いてたり、空想上のドラゴンが飛んでいたりした。
「妹、黒よ」
「んっ」
「どしたのー？」
「人生なんて無理ゲーだ。マゾゲーだと何度となく思ったが……遂にバグったぁぁ！」
「もう何これ」
「「超クソゲー」」
「アハッ！空も白も何言ってんの？こんな面白そうな世界素晴らしいじゃないか！僕をこんなにも楽しませてくれるなんてここの神様？は凄いじゃないか！あーテトに会いたいなぁー。興奮するなー。楽しみだなー」
「黒は相変わらずだなーＨＡＨＡＨＡ」
「…黒。浮気は駄目」
　白は黒に抱きつきながら咎める。そんな白に抱きつかれてる黒はえへへーと笑って

白と抱き合っていた。文字だけだと卑猥に見えるな。ってそうじゃねぇ！

俺達これから大丈夫なのだろうか。まともな奴がいないんだけどぉぉぉぉ！

彼女はやはり変わらない

……空ｓｉｄｅ

俺達がこの世界に訪れてから数時間が経過したんだが、その間に3人のバカ共からゲームを挑まれ、俺達が勝ったら身ぐるみ全てとこの世界の情報を貰う事にして勝負をした。もちろん俺達が勝った。

まぁ、なんとか歩き続けて街までたどり着いた。その時点で白が眠たそうにしていたからそろそろ寝泊まりが出来るが場所を探さないとな。そう思って辺りを見回すと、店の真ん中でゲームをしている2人組を見つけ窓の方で傍観してる相手に聞いてみた。

「なぁ、あんた。あの人だかりは何なんだ？」

「はぁ？あんた知らないの？次期国王選定ギャンブル大会よ」

「次期国王選定ギャンブル大会？」

「前国王の遺言でさ。次期国王は人類最強のギャンブラーに体現させるってね」

「へぇ。国王もゲームで決まるのか」

「あっちの赤い髪の子が〝ステファニー・ドーラ〟前国王の孫娘よ。前国王の遺言で毎回ゲームに参加してるのよ。そして、その相手が〝クラミー・ツェル〟って言ってとて

つもなくヤバい奴よ」
説明を終えた相手は、今もギャンブルをしている2人を見ている。
俺は話しかけた目的を果たす為に敢えて相手に挑発を仕掛ける。
「へぇ～、あんたは参加しないのか？」
「あたしかい？あたしはこれがあるからいいのよ。それに、相手のクラミーって子がバカ好きでさ。強すぎてほかの連中が辞退してしまうぐらいにね」
「ふーん。つまり、怖気付いたってわけだ。」
「ッ！なんだって!?」
「まぁ、ここで負けたって事実がなければぁ後からいくらでもいいおうがあるからなぁ？実は勝てたんだが……　見逃してやったんだとかな？」
「ふーん。面白いじゃない……　やるかい？坊や」
掛かった。
「悪いがお遊びのゲームはやるつもりは無い。……　その有り金全部だ」
「はぁ!? いくらあると思ってんの！互いが対等と判断したものを賭けないとゲームは成立しないのよ!!」
白と黒が俺の背後に来て黒が相手に提案した。
「なら僕を差し出すよ。それでどうだい？」

急に出てきた黒に相手は驚きながら黒に確認した。
「あんた、本気？」
「僕は嘘が嫌いなんだ。それに君が勝てば僕を好きなように出来るんだよ？例えば……　ほかの男に僕を売ればもっと大金が入るでしょ？ほら、僕のスタイルってさ意外と良くてさ？ほかの男からしたら大金叩いてでも欲しがると思うよ？」
「あんた。狂ってるわ」
「良く言われるよ」
黒がここまでお膳立てしてくれたんだここからは俺が仕切ろうか。
「さて、どうする？ゲームはポーカー1回勝負。こっちの掛け金は黒だ。」
「……」
「辞めるなら今のうちだぜ？」
「クッ！この余所者が！いきがるんじゃないよ！やってやろうじゃないの。盟約に誓って」
「盟約に誓って」
「アッシエンテ（盟約に誓って）」
相手がカードを切り、カードを配っていく。白と黒はもう結果が分かってるのかこちらを観ていない。

「(ふん。アンタの村じゃそのはったりが通ったとしてもここでは通らないわよ!)あんたの番よ。」
「はぁ」
　かーどを全部変える。これで仕掛けは終わった。
「あらぁ?ついてないわね。可哀想に」
「あぁ。今日1日で高度1万メートルからのスカイダイビングで炎天下の中歩き続けていたからな。確かについてない。」
「なんの話し?」
「別に。いいのか勝負で?」
「あたしはいいわよ?特別にもう一度だけ交換させて上げてもいいけど、どうする?」
「遠慮しとく」
「そう?それじゃあ‥‥　悪わいね坊や!フルハウスよ!!」
「ああ、そうだな。確かに悪い」
「え??ろ、ろ、ロイヤルストレートフラッシュゥゥゥ!!??ありえないわ」
「よく見ろ事実だ」
「嘘よ!嘘よ嘘よ嘘よ!だって65万分の1の確率よ!」
「その65万分の1が今だったんだよ」

「でもっ！」
「盟約その６。賭けは絶対に遵守されるだったよな」
「いったい……　何者よ」
「別に……　余所者だよ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

酒場のテーブルで待っている黒と白に戦利品を見せつける。
「兄ちゃん稼いできたぞ」
「にぃ、ずるい。あんなわかり易いイカサマ」
「空はイカサマ好きだもんね！」
「１０の盟約その８。『ゲーム中のイカサマは不正発覚とみなし敗北とする』要するに、バレなきゃ負けじゃないんだよ」
俺は笑うように２人からの白い目を避けて酒場のオーナーに頼む。
「３人一部屋。ベットは２つある所がいい、これでいくら泊まれる？」
「１泊だ」
「またまたぁ。騙し取るんだったら目線と声のトーンに気おつけな？」

「ちっ！2泊だよ」
「言っとくぞ？嘘を付くなら相手を慎重に選べ」
「……　はぁ。4泊だ」
「ありがとよ！」
「あんた、名前は？」
「空白でいいよ」
　待っている白と黒はステファニー・ドーラとクラミーのポーカーを観戦していた。
「待たせたな白、黒」
「……　あの人……　負ける」
「んーあの赤髪の子はポーカーフェイスを知らないのかもしれないね！でも、涙目の姿も可愛な～」
「黒。また……　浮気してる」
「もう！白ってばここは人が多いでしょ！服の中に手を入れないの！」
　また、白と黒の百合空間が出来てしまっている。俺としては特なんだが周りの目線がな？うちの白と黒を見てやがるから出来れば辞めて頂きたい。
「白と黒！こんな所でやるより宿取ったから、いちゃつくならそこでいちゃつけ！」
「にぃ……　グッジョブ!!……　黒？……　早く逝くよ？」

「白？なんか字が違う気がするんだけど!?なんでこの時に限って力強いの!?まって服がはだけちゃうから引っ張らないで！」
「兄ちゃん後で行くから気にしなくていいからなー」
「空ぁぁ～見捨てないで助けてよ～！」
　涙目でこっちを見てくる黒に俺はこう伝える。
「妹には勝てないんだよ……黒」
　はぁ、白の時間を邪魔出来ないから時間潰さないとな。それにしてもステファニーと言ったかな？ポーカーがまだ続いているが負けるのも仕方ないだろ？だってクラミーのやつイカサマしてるからな。白も見ていたから聞いたが、白の計算でも先が読めないみたいだ。まぁ、黒はその2人を観ずに、酒場の端っこにいるフードを被ってる相手を見ていたからな。ッ！なるほどね、この世界はさぞかし人間には辛いだろ。黒が見ていたのは耳がとがったエルフだった。
「この世界まじかよ」
　1人愚痴を零してしまうが逆に面白い！自然に笑みが零れてしまう。
　2人が最終ゲームに入った所で俺の優しさを見せるか。
「おたくイカサマされてるよ」

場所は変わって俺は白たちがいる部屋の前に着いた。

「白ー入っても大丈夫かー」

「……　大丈夫」

白からの許可が降りたからさそっく入りますかー。

今俺の目の前の現状を教えよう。

黒が凄く痙攣した状態で白に抱きつかれていた。しかも、肩で呼吸しているのとシャツが少しはだけているせいか黒のおぱーいが見えそうで見えないラインをさらけ出している。俺の妹は満足そうに黒を抱いて寝いている。なんて恐ろしいんだ！俺の妹は！

「そ、そらぁぁ。し、しろが激しすぎて、ンっ！」
「お、そうか。そ、それで黒は大丈夫か？」
「な、なんとかぁぁ」
「……　黒……　可愛かった。……　満足、おやすみ」
　白が寝たおかげか黒が息を整えて俺に訪ねてくる。
「これからどうする？」
「そうだなぁ、取り敢えず寝るか。起きたらまた考えよう」
「そうだね～。あ！空たまには一緒に寝る？」
「いやいやいや!?兄ちゃん白に殺されるわ！」
「ふふん。冗談だよ！おやすみ～」
　そう言って黒は白の隣で寝息をたてている。てか寝るの早いな！

白と黒の狂依存

黒サイド

コンコンッ

「ふあぁ～。ん～だれかきたの？」

眠い目を擦って気だるい体を起こして扉を開けに行く。

「新聞ならいらないよ～」

「え、あの、しんぶん？」

「あ、そう言えばここ家じゃなかった」

「あの！この部屋は変な男性の方のでは無いのでしょうか？」

「変な男って空のこと？んー空なら今寝てるからどうしよ？取り敢えず入る？」

「し、失礼しますわ。」

赤い髪の子ソワソワしてるなー。服装もなんか布？みたいな服だしあれ？昼見た時もっと赤い服じゃなかったけ？まぁ、どっちでもいいや。

「それで君は空に何かようなの？」
「そ、そうですわ！あの男が私にイカサマをされてると仰っていましたの！それで、ゲーム最中に教えてくだされば不正発覚で勝てましたのに！」
「あぁ～あの時のポーカーだっけ？」
「そうですわ！」
「うーん、これ言ってもこの世界の君じゃ分かんないと思うけど、あのイカサマは魔法でされてたからどうしようも無いと思うけど？」
「へ？私はクラミーに魔法を使われてたと仰いますの？でも、クラミーはイマニティですわよ？魔法適性ゼロなのにどうやって!?」
「えっとね、君がそのクラミーって子とポーカーしてる中で酒場の端っこにエルフいたよ？そのエルフがクラミーに手を貸してるんじゃない？」
「そ、そんな。なら私がやってた事は無意味だったって事？お爺様との大切な約束が果たせないなんて！」
　赤い髪の子が急に泣いてしまったからどうしよう!?どうにかして泣き止ませないと！
「えっとまだ名前聞いてなかったけど僕の名前は黒！君の名前は？」
「ステファニー・ドーラですの」グスッ

「ならステフ！僕が君を助けてあげるよ！」
「ほ、ほんとですの？」
「うん。任せてよ！こう見えて僕はゲームが得意なんだ！」
「ありがとうですわ！」
　僕がステフと約束をしている所で空が起きた。
「ふぁ～、何1人で騒いでるんだ黒さんや……黒が知らない女を入れている!?こ、これは白が起きたら修羅場になるんじゃね!?」
「……にい、うるさ……い？…黒……その女誰？」
　白が起きた途端に目のハイライトがｏｆｆになった状態で僕に詰め寄ってきた。
「こ、怖いよ！しろ！しかも近い！」
「……黒。質問に答えて」
「えっと～、なんて言えばいいのかな？僕の友達？」
「……黒？しろ以外に友達がいるの？黒にはしろだけでいいんだよ？ねぇ、しろのこと嫌いになったの？……また1人にするの？」
　ハイライトがｏｆｆの状態から次は泣きそうな顔で僕を見つめてくるしろ。こんなしろを見ていると、なんだが胸の当たりがキュウって締め付けられるんだよね。
「しろ。僕はねしろのことがとっても大好きなんだよ？だから、1人になんて絶対にし

ない。これだけは僕の全てを掛けてもいいぐらい。
だからね……　シロハボクノコトミステナイデネ？ゼッタイダヨ？シロニハボクガイルンダカラ……　ホカニナニモイラナイデショ？ほら……　こっち来て」
「……　うん。しろも黒のこと……　好き、好き、好キ、スキ、ダイスキ。ゼッタイニハナレナイ。ニガサナイ。ズットイッショ。クロタリナイヨ……　モットシロニチョウダイ」
しろが僕に詰め寄ってくる。これでもかという程に身体を抱き合わせ、腕の中に、瞳の中に、心の中に僕としろが溶け合う感じがまた心地良さを表し、その渦に溺れていく。周りからみたら僕と白はおかしいかも知れない。でもこれが僕達だから、シカタナイヨネ？

黒ｓｉｄｅｏｕｔ

空ｓｉｄｅ

「な、なんですのあの御二人は、正気じゃないですわ」
そこにいる痴女と思われても可笑しくない子が白と黒の光景をみて唖然としていた。

まぁ、初めて見る人からすると白と黒は異常とも呼べるんだろうな。俺からすると白と黒の過去を知っているから大丈夫だが、知らない奴からしたら目の前にいる2人は狂っているように見えるんだろうな。

白と黒は定期的にあの症状が起こりやすいんだよ。特に、白が情緒不安定になるとよく起こることだ。2人の精神が安定すればば戻るんだが、これが意外と厄介なものなんだよ。可愛い妹と唯一の俺の親友だ。こんな状況になったとしても面倒見てやるのが兄ってもんだ。

「そこのおまえ、俺に何か用があったんだろ？」

「そ、そうですわ！危うく忘れかける所でしたわ！」

そこのステファニー・ドーラが言うには昼のポーカーで負けたのがイカサマだったのが分かって、それを教えた俺に会いに来た所で黒と出会い何やかんやで助けてやると言ったみたいだ。

「はぁ、黒がお前を助ける判断したんだったら助けてやる。けどな、こっちだって無償で働くのは理不尽だよな、それは分かるか？」

「と、当然ですわ！わたくしの名に掛けてお礼を尽くすに決まってますわ！」

「言質とったからなステファニー。じゃぁ、この世界らしくゲームで閉めようじゃないか。丁度ここにはトランプがある。ルールは簡単だ、お互いがカードを2枚取り1枚を

オープンし勝負が始まる。このゲームではカードのトレードが1回だけ許されている。オープンされている奴でもいいし伏せたカードでもいい。そして、トレードが終わった2枚のカードで数字が相手より高ければ勝ちだ。勝利の報酬はお互いが1つの命令権を所持する」

「単純な運任せの勝負ですか。分かりましたわ！このステファニー・ドーラが勝利を掴み取ってあげましょう！」

俺は新品のトランプを箱から取り出シャッフルをし始めた。

さて、黒の為に人肌脱ぎますか。